医療現場: 看護部

テーマ ：ベッドサイドでの排泄時の不快感の改善

■ 背景

骨折手術後や脳卒中などの疾患により歩行困難に陥ったために、トイレでの排泄が容易でない患者にとっては、ポータブルトイレで排泄が自立して出来る事が退院～在宅復帰への最大の条件である。排泄の介助は介護者の負担感が大きく、患者本人の自尊心も傷つけやすいため、患者家族の関心事の一つでもある。

急性期脳卒中リハビリテーションの目標の一つとしてトイレ動作の自立が挙げられており、患者のquality of lifeの向上に大きく関与する。

〈出典：看護 roo!〉

■ 現状の課題

体の不自由な入院患者でトイレまでの移動が難しい場合は、看護師がベッドサイドへポータブルトイレを運び込みその場で用を足すことになる。複数名が入院している総室の場合は、互いのベッドはカーテンで仕切られているのみであるため、同室の患者へ臭いや音などで不快な思いを感じるさせることとなる。同時に患者自身も同室者へ不快感を与えてしまう心苦しさをから排便を我慢してしまうこともあり、これは治療に影響を与えることもある。

ポータブルトイレは重いと移動に際して看護師の負担が大きい半面、患者が乗る時には安定して転倒しにくいという利点がある。

■機能アイデア例

・同室者へ臭気を感じさせない機能
・病室にしばらく置いていても邪魔にならない事
・音姫の様な擬音効果（夜間は同室者の眠りを妨げない工夫があること）
・体重をかけても本体が動かないストッパー機能（＋解除も容易であること）
・つかまり棒など体を支えるための機能

■ 市場性

厚生労働省の2017年の調査によると、脳血管疾患患者数は約112万人と報告されている。救命後の回復期の約七割に重い運動麻痺が認められるという報告もある。

家庭用も含めてポータブルトイレは、夜間の安全なトイレ移動や自立支援の観点から普及し、2013年は販売額58億円、販売台数29万1,500台（富士経済調べ）と報告されている。夜間の排泄誘導が不要になるなど、家族支援の側面からも評価されている。社会の高齢化に伴い、脳卒中以外にも運動機能麻痺あるいは運動機能低下者の増加が見込まれるため、市場は拡大することが見込まれる。

■ 看護部のホームページ

http://sumsnurse.es.shiga-med.ac.jp/